

木地師の一生

—兵庫県美方町の場合—

渡 辺 久 雄

目 次

- 一、まえがき
- 二、美方町の環境と木地師の分布
- 三、木地師の家族
- 四、移動と定着のパターン
- 五、世代の交替とその一生

一、まえがき

江戸時代から明治期にかけて、深い樹林に覆われていた中国山地を移動しながら、^① 椀・盆・杓子などの木器生産に従事した木地師とその家族たちについて、地域限定をした上で、かいま見ようとするのが本稿の目的である。中国山地は兵庫・鳥取・岡山の三県域にまたがり、この期間（約二二五年）に、但馬国で一五七〇人、播磨国に六六三人、因幡国一八二五人、伯耆国一六七九人、美作国三六七一人、合計九四〇八人（いずれも延人員）の木地師が活躍していたが、この数字は木地師たちの唯一の記録である氏子^② 駄帳に基いたもので、当然記載洩れも考えられる。従ってそう

した者も含めるなら概数一万五千人前後とならう。しかし今回は地域を兵庫県美方町に限定し、カード化した九四〇八人の中から、該当する七七九人を選び出して検討を加えた。この数は全体の大約九％抽出に当る。美方町域の自然環境は、ある意味で中国山地の代表といえるし、また江戸時代という封建社会を共通に生き抜いてきたということもあり、この地域での木地師たちの一生のパターンは、他地域のそれを推すのにも役立つことにならう。ただし、それは中国山地の木地師についていえることであり、環境の著しく異なる中部・北陸・奥羽の木地師に対してまで適用できるとは考えていない。

さて木地師とは、と問われた場合、さまざまな定義づけもできようが、ここでは一応、同時代人のみた木地師の姿を『斐太後風土記』の中から引用するに止める。

木地師〔三郡村々の深山に住み、住所は不定〕

椽・樨等の木を伐り倒し、椽形をおこし、小屋にて椽木地に椽て、山に住む人を俗に木地屋とも木地師ともいえる。それはこの鷹狩郷の山に限らず、小島郷・高原郷（中略）等の村々の荒山中に住みて、用材のあらん限りは、年々に椽木地をひきて、高山・吉川その他、元方仕入れの商人へその木地を送り〔商人はその木地を紀伊国海士郡日方へ送りて売捌きぬ。日方は若山より一里ばかり南、黒江と並べり。名所図会に黒江椽の図あり〕米塩を得て生業す。五六年を経て山内の用木を伐り盡せば、又他山の山に移り住みて、生涯その山には住み果がたし。故に俗に、度々住所を換る者を木地屋の宿替という。国中山々假住の木地師、小屋敷……。先祖は、惟高親王の臣、小椽大臣の末葉なりとて、皆小椽何某という。惣管は近江国犬山郡か、愛智郡の深山に在るとぞ。昔は木地師、親の継目に、一度惣録所へ出て、鳥帽子・真垂着用の免許を受けたりとぞ。来由の系図、今は詳に知る人世になかるべし。木地師は、男女とも深山の小屋にのみ住みぬれば、日々日光に照らされず、世に稼行ても深山故、瘡疱にも犯されず、自然男女とも顔



図1. 木地師の一家（斐太後風土記による）

色白く、尻腰大なり。故に顔色白く腰太き女を、俗に木地屋の娘なるべしという。（図1）

二、美方町の環境と木地師の分布

対象地域に選んだ美方町は、美方郡の西南隅にあり、（図2）兵庫県下の北海道といわれるように気候条件が厳しい。その上、交通も現在なを便利とはいえない地域である。この為、人口は県下最下位（昭和四十九年十月現在で三四五五人）であり、年々それも減少の傾向を示す過疎地の典型を示している。また耕地よりも山林の占める比率が高く、昔から作物以外の収入に頼らねば暮してゆけないところでもあった。冬季出稼の一つである但馬杜氏たちの故郷も、美方郡が中心である。

図2に示されるように、美方町は雄峯水ノ山を挟んで鳥取県八頭郡若桜町に接し、県下では同じ美方郡域に属する村岡町・温泉町とつらなり、また養父郡関宮町に隣している。しかし政治行政区域は異なっている、谷と尾根さえ伝うなら、ど

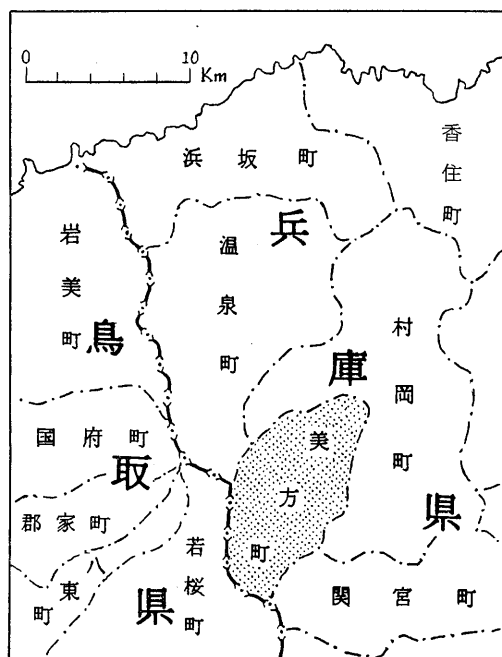


図2. 兵庫県美方町の位置

ここでも行けるから、現在は無論のこと、江戸時代においても、木地師たちの間では、相互の往来があつたとみてよからう。

中国山地全般における木地師分布(図3参照)の中でも、氷ノ山を中心とした一帯は密に分布するところであり、兵庫県側の美方町、鳥取県側の若桜町はその代表である。この美方町における木地師分布は(図4参照)矢田川流域であるが、最初のうちは猪ノ谷・小長たわ、といった支流沿いか、本流でも比較的河川に近い茅野山などの地点が選ばれ、年がたつと共に矢田川本流の山奥に移り、さらに

県境や郡境に近いところに移住したことがわかる。(表1・2参照)また表によると、こうした分布地の中で、(1)永続性のあるもの、(2)一時期の分布でたちまち消えるもの、(3)一〇〇八〇年位続くもの、三型が認められる。(1)の型には茅野山・小長たわ・秋岡山・えび原・とろ川・新屋・横谷などが、(2)の型には猪ノ谷・うそこえ・中小屋・上小屋・元横谷・鍛冶畑・滝山・三ツ滝・福定山・叶理・城山・北浦・大仙などが、(3)の型には熱田・青野山・氷ノ山・佐坊山などが属する。

居住地の選定や永続性が、生活の根本条件である飲料水を得ることの難易によることはいうまでもないが、この地方なら水の条件はむしろ同じとみて良いので、やはり資材となる樹木(トチ・ブナ・ホウ・ケヤキなど)の存在とそ

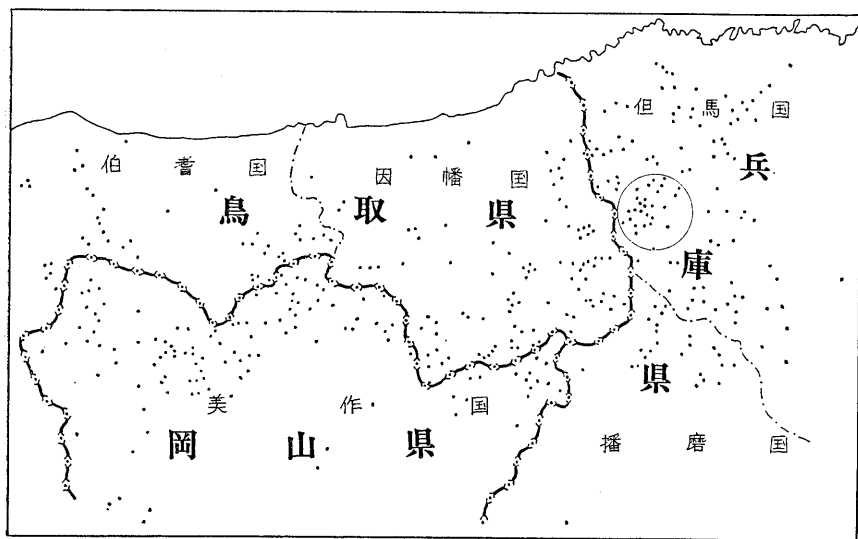


図3. 中国山地における木地師分布（小円内が美方町）

の量が重要な要因となろう。(図5・6)もちろん豊かな資材があるといつても切り盡してしまうと、そこでの生活は不可能となり、移住(いわゆる木地屋の宿替)が始まることになる。植物生態学の研究によると、一たん切り尽された樹木も、一五〜三〇年経つと自然の成育がみられるといわれるので、樹種も、その量も多いところでは、一定年数の後に、樹木の成長をまっけて木地師たちの回帰が行われているのではなからうか。するとこの様な回帰性のある地点が、先きに述べた(1)型であり、樹種も少く、浅い山の場合に(2)型になるのであろう。回帰性の問題については項を改めてとりあげる。

三、木地師の家族

まず最初に問題となることは、木地師一家が何人程の家族から成つていたかという点であり、次は直系家族のみか、それとも傍系家族も同居していたのか、ということである。若干の史料によると、鳥取藩の家老日記、元禄六年五月十九日付に「一、播州^{マツ}二形郡水谷鉄山八藏母共に式人河村郡尼子木地屋へ永代引越申度由。二、作州大庭郡下和村市右

表1. 各地点の年次別戸数表

	正保 四年(一六四七)	明暦 三年(一六五七)	寛文 五年(一六六五)	寛文 一〇年(一六七〇)	延宝 七年(一六七九)	貞享 四年(一六八七)	元禄 七年(一六九四)	宝永 四年(一七〇七)	享保 五年(一七二〇)	享保 一二年(一七二七)	享保 二〇年(一七三五)	元文 五年(一七四〇)	延享 一年(一七四四)	寛延 二年(一七四九)	寛延 四年(一七五一)	明和 一年(一七六四)	安永 九年(一七八〇)	寛政 一一年(一七九九)	文政 一三年(一八七二)
茅野山	4	1			4				5				1				2	1	
小長たわ	4	5	11						1	2				1					
うそこえ	7	2																	
中小屋	4	10																	
猪ノ谷	1																		
秋岡山				3		8		3	5	9	3				4	5	5		
えび原	4		3		2	2				3									
熱田	3		9		2														
とろ川	10	4													4				
上小屋	5																		
新屋			3			1	3	2	2	3	3	3	3	1	3				
横谷	8	10	7		7	2	2	3	1		3								
青野山	7	7	4		2														
氷ノ山	8					7		7											
元横谷				9															
鍛冶畑				5															
滝山					3														
三ッ滝						15													
福定山										5									
叶理											1	4							
佐坊山											3	3		2					
城山												2	2						
北浦													1						
大仙															3	3			

表2. 各地点の年次別人口表

[illegible]

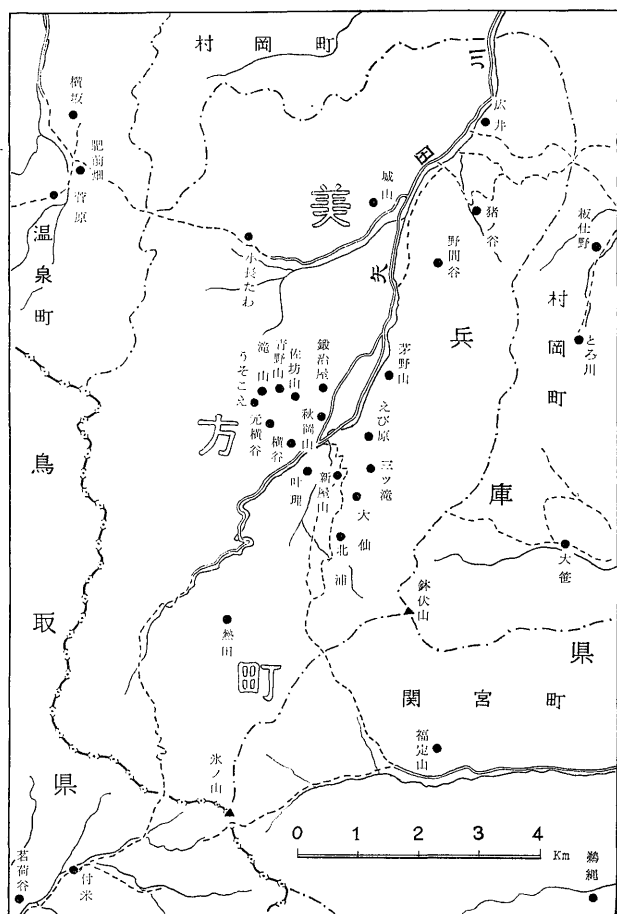


図4. 美方町の木地師分布地

頭町の史料によると「放手形請取之事 一杓子師源左衛門家内四人者共並沖右衛門、久五郎後家喜娘二人以上八人貴殿放手形を以参り候ニ付此方長面ニ書入申候 為後日之仍而如件。作州吉野郡大茅村庄屋伝次郎[㊦] 文化十四年丑ノ十一月日 因州智頭郡奥村庄屋伊三郎殿」と「宗門人別放手形之事 美作国勝北郡真殿村庄屋内 木地師源左衛門当辰四十一 同人娘もと当十五 同断くら当十二 同断とめ年九 同断いせ年六 同人妻い巳年四十五

衛門、伊左衛門、七郎兵衛、吉左衛門一家妻子共廿七人河村郡中津木地屋へ永代引越申度由、また同七年九月二日付に「八東郡糸白見村木地挽太郎兵衛、清右衛門、八太衛門一家十五人作州吉西郡たん原へ永代引越申度旨」とあり、元禄六年のこの場合では家族数平均六・七五人、同七年の場合では平均五人である。また鳥取県智



図5. (A) ト チ

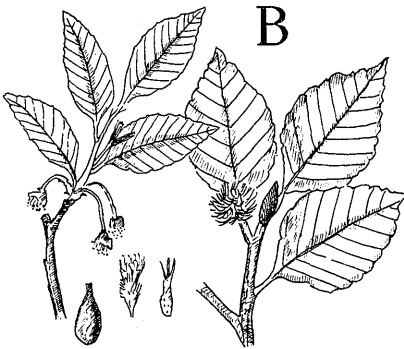
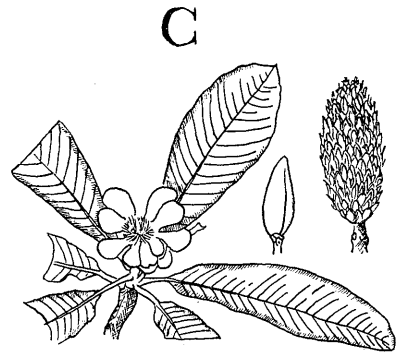


図6. (B) ブ ナ



(C) ホ ウ

右之者共儀去ル寛
正五年丑年、その地
小白坪村より当村へ
罷越致、木地職之家
内ニ致入帳罷在候。
……(中略)……勝
北郡真殿村庄屋与吉
郎 文化五戊辰年正
月 因州智頭郡奥村
庄屋武平殿」があり、
前者の家族数は四人
と三人、後者の家族
数は六人であったこ
とがわかる。元禄年
間の史料と文化年間
の史料との間には百
年余りのへだたりは
あるが、社会条件が
それ程差異のないも

のとすれば、一家族平均五～六人といえそうである。もちろんこの数字は親子という直系家族を考えた数字で、祖母や伯父、伯母、いとこ迄を包括した一家ということになれば、その数字はこれをはるかに上廻ることであろう。さらに一緒に暮らしていた非血縁の同居人のことを計算に入れると恐らく十人以上の世帯もあったと思われるが、直接的にこのことを証明するだけの史料は今のところみつからない。むしろ後述する移動や世代の交替の項でうかがわれるように、大家族単位よりも小家族単位の方が普通ではなかったかと考えられる。参考迄に同居人に関する数少ない記載例を氏子⁽⁷⁾駆帳の中から拾ってみると次の様な例がある。

「享保五年 但馬国朝来郡佐中 一新銀五分 はっお 次右衛門、一新銀八分 うじこがり(四人) 同人、一新銀二分 うじこがり 同人内長九郎、一新銀二分 うじこがり 同人内五郎兵衛、一新銀二分 うじこがり 次右衛門長九郎母」 この例から、次右衛門一家には七人が住み、内四名が血縁者、残り三名が非血縁であったことがわかる。血縁の内容についての記載例は親子・兄弟が大部分を占めているが、後述の過去帳などから伯父伯母や尊族の幾人かが同居していたことも明らかである。

四、移動と定着のパターン

本地師たちが移動するのは、まえがきに引用した『斐太後風土記』の誌るすとおりであるが、その移動の仕方に何らかのパターンがありはしないか、それを検討したのが本項である。まず最初に、(1)移動路をとりあげ、次に(2)移動をやめて定着してゆく型にふれ、最後に(3)移動を繰返しながら一生を終える型を、その規模・集団内容・移動周期・同一地点への回帰性などの諸点から眺めてゆくことにする。

(1)移動路に関する記録はもちろん残っていない。しかし本地師仲間がそれぞれ勝手気ままなルートを通じて移動したとは考えられない。山自体の持つ地形、気象条件、動植物分布などへの対応の必要から、必ず一定の道すじをとり、

先達にそれを教えられ、次々とそれを伝え守りつつ移動を続けたことが考えられる。

木地師自体の記録ではなく、木地師たちの間を巡回して奉賀金を集めて歩いた巡国人（通常複数）たちの記録が、姪谷側と君ヶ畑側の氏子駆帳の中に出ている。それによると、本所である近江国小椋庄を出発した巡国人たちが、いよいよ集金先きの国に入ると、必ずその土地の地理に詳しい木地師が道案内役として同行していることがわかる。また木地師たちの消滅する明治期、最後の巡国人の役目をしたという小椋亀次郎翁旧事談の中にも、「白河まで汽車に乗って行き、そこから廻りはじめたのです。つぎからつぎと山越しに行きました。本道を行くと三里も四里もある遠い所でも、間道を行くと近いものでした。四月というのに山々にはまだ雪が残っていて、その尾根を案内が立ち、草鞋越えで行きました。木地屋の村は随分とありまして、三十位も訪ねました。だいたいわたしたちの順廻は近いところは奥州へよく行きましたものです。（中略）もう一月も行ったら嫌になりましてな。苦しかったことというては、もうどんなことがあっても木地屋なんぞにはなりたいたいと思いませんでした。帰って来たら、大きい風が絆縹しるみ じゅばんについていて、母親がびっくりして、奥州の風は色が違う、といって笑っておりました」とあって苦労した巡国人や案内の姿がしのばれる。話しが前後して恐縮であるが、氏子駆帳の記録の例は、享保五年（一七二〇）の場合「十月十四日、是迄丹波山御廻。但馬江越時、くわんをん寺前迄御おくり衆、吉十郎、勘右衛門二人。其次ノ日但馬やなせノ町ニ壹泊り。其次日妙見かせを千太郎殿、山本や也を奉願」また別のところに「まづ、子ノ年、此分ニテ大坂へ登り申候、大雪にてなんぎ仕候。それ故まず仕也ニいたし候、おくり衆ひのはら重五郎、吉郎兵衛ニハ津田木地屋善介迄。子ノ十一月十一日」とある。同じ享保十二年（一七二七）の記録の中には「但州とうじ木地屋九郎右衛門までニ仕申候。それより播磨しそう郡三方小原きじや今は百姓喜十郎まで平右衛門、太郎おくり」と「丹波桑田郡洞山水おち杓子や長九郎まで、同国くわんおん寺村元助宿、それより但馬かせを一泊。それよりかせ尾村木地や市兵衛」

以上の記事の中に出てくる吉十郎・勘右衛門、千太郎、重五郎・吉郎兵衛、平右衛門・太郎、市兵衛が案内役をつ

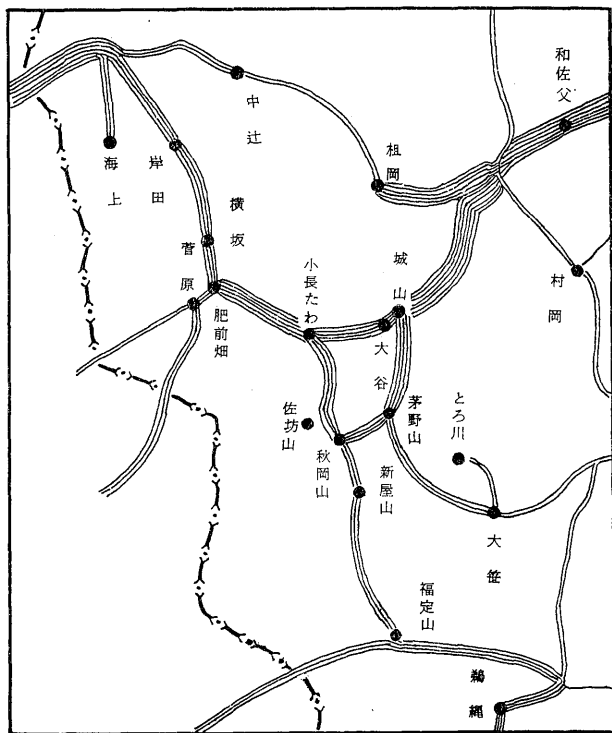


図7. 巡国人ルートとその頻度（17世紀）

に伴うルートの変更や巡回量の増減の様子がうかがわれる。特に峻峯氷ノ山を越す、但馬・因幡（兵庫県・鳥取県）のルートが活潑になってくるのが目立つ。図9では、図中に示された日付から、わずかに九日間のうちに巡国人たちは氷ノ山・扇ノ山の峠を五回も越えており、その健脚ぶりがうかがわれる。

(2) 移動から定着え移行して行く過程には、資材の涸渇が関係するが、この点については(3)の中の周期性や、同一地

とめた木地師なのである。これらの案内の木地師たちは大略一日行程で次の案内役と交替したようである。こうして巡国人たちは案内人に導かれながら一定ルートを集金して廻るのであるが、このルートこそ、木地師たちの熟知した移動の道でもあったにちがいない。幸い氏子駈帳は木地師の住地を巡回順に記録しており、場合によってはその日付を書きとめているので、しばしばことわったように、美方町に地域限定をして地図化してみた（図7・8参照）

この図を通し、十七世紀と十八世紀以降とでは、木地師の分布状態の変遷

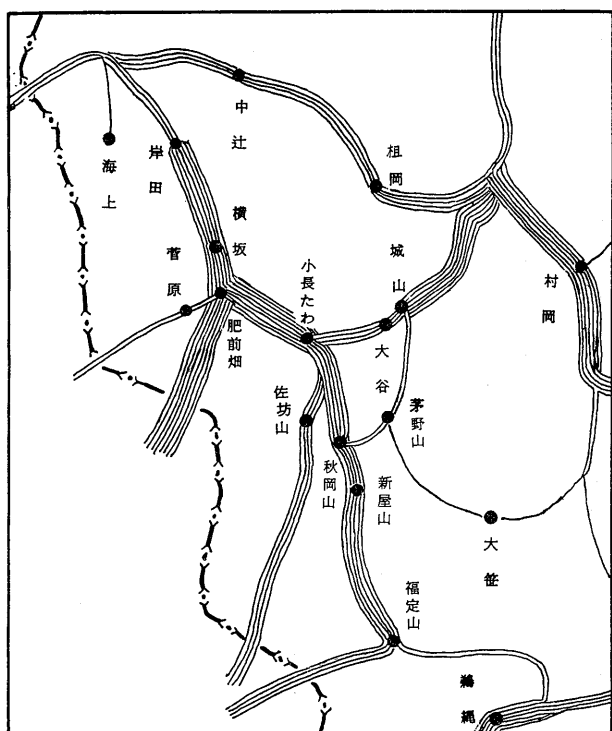


図8. 巡国人ルートとその頻度 (18・19世紀)

点えの回帰性の項で述べることにして、ここでは木地師としての定着ではなく、木地師を廃業して、農民となつて定着する場合を中心に考える。⁽¹⁰⁾氏子断帳の中に出てくる記録に「宝永四年(一七〇七)但馬二方郡岸田村山肥前畑、百姓住、長五郎事助右衛門」「享保五年(一七二〇)但馬二方肥前畑、百姓住、彦左衛門、但馬七味郡小代小永たわ、元木地屋、今は百姓住、市左衛門」が但馬でみられる。但馬の場合は、肥前畑小永(長)たわの二地点であるが、他の国々では、播磨九地点(二九人)、因幡一地点(四人)、伯耆四地点(一七人)、美作一〇地点(一九人)の記録があり、播磨の国が最も多い。また記載の始まる時期は十八世紀に入ってからで、宝永四年(一七〇七)が最初であり、享保年間に入つて次第に現われてくる。というこ

とは十七世紀迄各地にあった資材が、その山地の浅い深いの差異から、地域差を示し始めたとみることができよう。即ち播磨が最も早く資材が尽き、植生が二次林に移行してゆく過程を示している。この点については、筆者は「⁽¹¹⁾但馬の木地師分布」の中で概説的にふれたことがある。ところで、木地師たちにとって、その

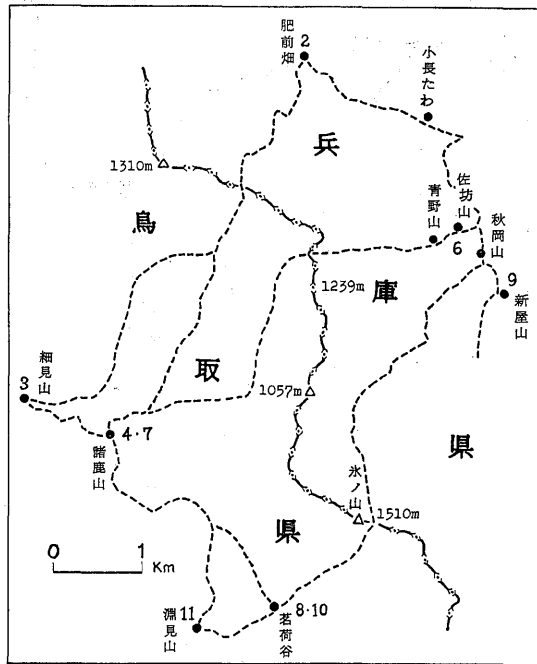


図9. 国境越のルートと日付

長い歴史と伝統を持ち、近世以来の検地制度で固められた平野部農村では、身動きもできないきびしさがあったであろうが、人里遠い深山の中で、三戸、五戸が開いた村里迄がそうであったとは思われない。もちろん既存の農村の中に次第に融け込んで行く者もあったであろう。しかしそこには苛酷な条件があったであろうから、むしろ仲間だけによる新しい農村の形成が多かったのではないかと思う。事実われわれは現在各地に、一村（藩制村）あげて小椋姓の村々を見ることができる。

話しが元に戻るが、氏子駈帳の記載に、百姓住と木地屋筋百姓という書方がある。もともと単なる百姓が、木地屋

地の資材が尽きた場合、採るであろう方向は二つ考えられる。一つは技術指向型の方向で、どこ迄も木地師技術を維持するために、その資材の豊かな場所に移動して行く、いはば木地師本来の型である。他の一つは、土地指向型とでもいべきもので、住みなれた場所、資材涸渇という環境の変化に適応させるため、木地師の技術を捨てて、農耕者となってゆく型である。

きびしい封建身分社会の中で、土地指向型を採った木地師たちが、帰農して農村を作ることの困難性を指摘する人もいるが、はたしてそうであろうか。なる程、一千年以上もの

仲間の集金に應じる筈はないから、百姓と書かれていても、木地師の出であることはわかる。となると何故木地屋筋百姓とわざわざことわるのであろうか。それは恐らく当時の身分社会における一つの抵抗があるからであろう。というのは、木地師たちは農民側からする輕視に対して、自分たちが貴族の末裔であることを誇示して、木地師の筋目を強調していたわけであろう。しかしこの様な巡国人を通した本所側の努力にもかかわらず、十八世紀後半にもなると、帰農者たちも完全に農民となり、もはや奉賀金の徴集に應じず、木地屋筋目であることを拒否した形跡がある。なぜなら当然帰農者数が増加すべき十八世紀後半から十九世紀にかけて奉賀に應じた木地屋筋農民の名が一人も記録に出てこないからである。

(3) 木地師たちの典型である移動を繰返す型について、まずその規模と内容から眺めてみよう。移動規模は、特別な例を除くと大体二―三家族が行動を共にしているようである。特別な例とは表1・2の小長たわ・中小屋・とろ川・三ッ滝の場合で、特にとろ川や三ッ滝では突如一〇―一五家族が移り住み、しかもまもなく次の地点に移っている。こうした大規模の移動と逆に、一家族または家族から離れて単身移動する例もみられるが、きびしい山中での生活を考えると、この様な例はやはり例外とみるべきであろう。

次に、移動の内容をみると、移動仲間は常に同一ではなく、一―二回は行動を共にするが、次には別な仲間と組んで移動している。表3に従って一地点の木地師たちをみると、ある期間同一家族が続くが、次の特期にはすっかり住人が入れ替ってしまう(表4)。換言すると木地師たちの家族同志は、気軽に結ばれたり、解けたりとの関係を続けながら、その生活を営んでいたといえる。農村にみられるような水規制もなく、⁽¹³⁾氏神も遠い本所の近江国にあるということが、相互の家族の結び付きを自由ならしめたものであろう。

最後に移動の周期及び回帰性の問題にふれてみたい。これらが資材となる樹木の植生と関係を持つことはいちどもない。樹種によって成長に若干の相異はあるにしても、ほぼ一五―二〇年で資材になるとすれば、木地師の移動にも同

表 3. 移動のパターン(1)

名	年次
1 太 兵衛	正保 4 年 (1647)
2 長 左衛門	明暦 3 年 (1657)
3 次 兵衛 <small>うそこえ</small>	寛文 5 年 (1665)
4 六 兵衛 <small>うそこえ</small>	寛文 10 年 (1670)
5 長 兵衛	宝延 7 年 (1679)
6 次 右衛門	貞享 4 年 (1687)
7 七 右衛門	元禄 7 年 (1694)
8 平 左衛門	宝永 4 年 (1707)
9 弥 兵衛	享保 5 年 (1720)
10 嘉 右衛門	享保 12 年 (1727)
11 仁 兵衛	享保 20 年 (1735)
12 九 兵衛	元文 5 年 (1740)
13 市郎右衛門	延享 1 年 (1744)
14 善 五郎	寛延 2 年 (1749)
15 七 左衛門	寛延 4 年 (1751)
16 助 右衛門	安永 9 年 (1780)
17 長 左衛門	
18 勘 三郎	
19 吉 五郎	
20 徳 兵衛	
21 権 兵衛	
22 四郎兵衛	

表4. 移動のパターン(2) (新屋山の場合)

					平左エ門	太兵衛	宝永4年 (1707)
					重右衛門	徳右衛門	享保5年 (1720)
					重右衛門	佐次右衛門	享保12年 (1727)
					吉五郎	吉右衛門	享保20年 (1735)
					長左衛門		元文5年 (1740)
					久左衛門		
					助右衛門		
					七左衛門		
					七左衛門		
					勘三郎		
					勘三郎		
					勝之助		
関					徳兵衛	内蔵之助	延享1年 (1744)
松					長左衛門	藤左衛門	
					安右衛門	三右衛門	寛延2年 (1749)
						菊重郎	寛延4年 (1751)
						元助	安永9年 (1780)

様な周期がみられ、かつて住んでいた地点に又戻ってくるといった回帰性があるのではないかと考えてみた。この点の検討に限って美方町はもちろんのこと、但馬・播磨・因幡・伯耆美作の例にも当たってみたが、多くの時間をかけた割に思う様な結果を得られなかった。その原因は唯一の資料である氏子駆帳そのものにあつた。即ち記録年次(巡国年次)の間隔が二、三年とさまざまであるため、周期を決めるには不適當であつたこと。また回帰性の手掛となる記名について、わずかに二例は同一人名を見出すことができたが、大多数は同一地点で毎度異なる人名が出入していた。一見異なる人名であっても親子である可能性もあったが、それを区別する記載例が少く、判別ができなかった。従つて、残念ながら今のところ移動に周期があり、回帰性があるであろうと推定するに止まる。

五、世代の交替とその一生

山中を自由に移動する木地師たちでも、宗門人別はきびしく、住地から四里以内にある寺の壇家となることが規定されていた。従つて美方町でも秋岡の龍泉寺(曹洞宗)、平野の光明寺(真言宗)、大谷の念願寺(浄土真宗)の三寺に残る過去帳の中から一六四名の木

地師関係記事を見つけることができた。木地師記録といえは氏子駈帳が唯一のものであっただけに、過去帳の記事は貴重な研究資料となった。しかし両者を照合してみると、いずれかの一方にあって他方ない例が多く、役立つのは十数家族に止った。その中から特に世代の交替と木地師一代の姿を浮彫りできる幾つかを、事例としてまず年次別に掲げて考察を進めることにする。

(1) 忠右衛門・九郎右衛門・元助一家

宝永四年（一七〇七） 忠右衛門一家、海上に住む。家族七人、その中に子九郎右衛門、孫宇兵衛の名がみえる。

（氏子駈帳）「以下氏子駈帳とあるのはすべて蛭谷側のものを指す」

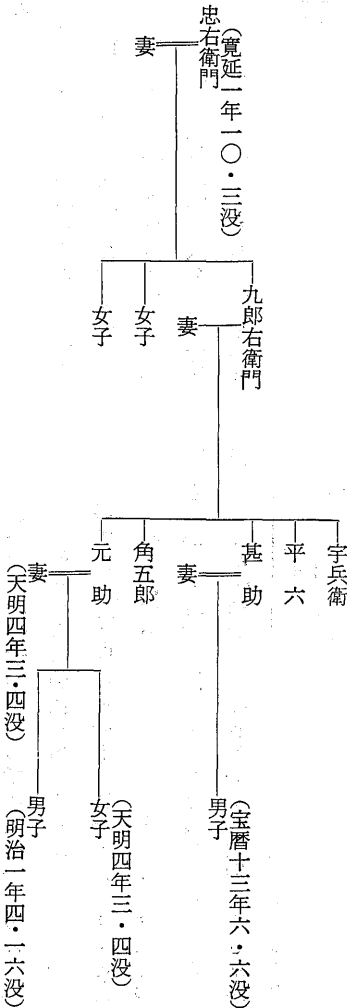
享保十二年（一七二七） 忠右衛門単身で秋岡山に住む。（氏子駈帳）

元文五年（一七四〇） 九郎右衛門、父忠右衛門をつれて横行山に住む。家族一〇人、その中に九郎右衛門子平六

の名がみえる。（氏子駈帳）

延享一年（一七四四） 九郎右衛門一家、秋岡山に住む。家族一〇人、その中に子甚助の名がみえる。（氏子駈帳）

表5. 忠右衛門・九郎右衛門・元助一家の系図



寛延一年（一七四八） 九郎右衛門の父忠右衛門没す。通山百円居士（龍泉寺過去帳）

寛延四年（一七五一） 九郎右衛門一家、なお秋岡山に住む。家族九人、その中に子甚助・角五郎・元助の名がみ

える。（氏子駟帳）

宝曆十三年（一七六三） 甚助子没す。智淨童子。（光明寺過去帳）

安永九年（一七八〇） 元助新屋山に住む。家族四人。（氏子駟帳）

天明四年（一七八四） 元助妻没す。本寛妙証（光明寺過去帳）

同年 元助娘没す。如幻童女（光明寺過去帳）

明治一年（一八六八） 元助子没す。元庭慈孝信士。（龍泉寺過去帳）

以上の記録に基いて、この一家の略系図を描いたものが表5である。忠右衛門・九郎右衛門・元助と三世代にわたるが、それぞれの世代の交替期を次の様に考える。即ち忠右衛門から九郎右衛門への交替は、忠右衛門が家族から離れて単身秋岡山に移り住んだ時、享保十二年迄に行われていたであろう。従って一代は二〇〜三〇年間である。次に九郎右衛門から元助への交替は、宝暦十三年以前で、寛延四年以後の間であろう。それでも九郎右衛門一代は三〇〜五〇年間に相当する。次の元助については、史料もなく一切わからない。ただ気になる点は、彼が末子相続をしているのではないかということで、今後の検討をまちたい。また哀れなことに、彼の晩年、有名な天明の飢饉で妻と娘と同じ日に亡くしている。彼の息子が明治迄いたので、美方町内でその子孫を捜せるかもしれない。

(2) 万右衛門・長太夫一家

延享五年（一七四八） 万右衛門伯父没す。淨空信士（龍泉寺過去帳）

明和五年（一七六八） 万右衛門父没す。雲山了溪信士（龍泉寺過去帳）

安永三年（一七四四） 万右衛門弟没す。本源実心信士（龍泉寺過去帳）

安永九年（一七八〇） 万右衛門一家秋岡山に住む。家族七人。その中に子長太夫の名がみえる。（氏子駟帳）

寛政四年（一七九二） 万右衛門伯父没す。寂翁了然信士。（龍泉寺過去帳）

寛政五年（一七九三） 万右衛門孫没す。幻秀童女。（龍泉寺過去帳）

寛政六年（一七九四） 万衛門娘没す。桃嶽妙円信女。（龍泉寺過去帳）

寛政八年（一七九六） 長太夫母（万右衛門妻）没す。浮応妙雲信女。（龍泉寺過去帳）

寛政十二年（一八〇〇） 長太夫父没す。仙翁自長信士。（龍泉寺過去帳）

文化三年（一八〇六） 長太夫養子没す。雪屋凍眼信士（龍泉寺過去帳）

文化五年（一八〇八） 長太夫養子没す。仙遊智円信士。（龍泉寺過去帳）

文政十一年（一八二八） 長太夫娘没す。智秋信女。（龍泉寺過去帳）

文政十三年（一八三〇） 長太夫没す。勝山良智信士。（龍泉寺過去帳）

以上の記録から、世代の交替時期は寛政六～八年の間にあるから、万右衛門の世代は四八～五〇年の長きにわたっている。家督を長太夫に渡して後、二年後に没しているのが、初出の延享五年が二〇～二五才であったとすれば、万右衛門は七〇～七五才位の高齢であったということになる。彼の戒名が仙翁自長信士と名づけられているのもこの事実を裏付けしている。父が長命でその一代が長かっただけに、その子長太夫の世代は三四～三六年で、その名の初出の安永九年に一五～二〇才であったとすれば、六五～七〇才位迄生きていたことになる。また万右衛門一家で気付くことは、本人の直系家族の他に伯父、弟などが同居していた点である。さらに長太夫の世代になり、娘がいるにもかかわらず、男の働き手としての養子を迎えていたこと。そしてその一人が山中で凍死するといった不幸な目に遭っていることである。

元禄七年（一六九四） 四郎兵衛一家三ッ滝に住む。家族五人。その中に子善太郎の名がみえる。（氏子駈帳）

宝永四年（一七〇七） 四郎兵衛一家横谷に住む。家族八人となる。子吉太夫の名がみえる。（氏子駈帳）

宝永七年（一七一〇） 四郎兵衛娘没す。松雲寿清信女（龍泉寺過去帳）

享保五年（一七二〇） 四郎兵衛、单身因幡国の諸鹿山もろがに住む。吉太夫一家はえび原に住む。家族九人。（氏子駈帳）

享保十一年（一七二六） 吉太夫母（四郎兵衛妻）没す。永法妙悦信女（龍泉寺過去帳）

享保十二年（一七二七） 吉太夫一家、秋岡山に住む。家族七人。（氏子駈帳）

享保十七年（一七三二） 吉太夫娘没す。西岸浄方信女（龍泉寺過去帳）

元文五年（一七四〇） 吉太夫一家、氷ノ山ひょうぜんに住む。家族五人。（氏子駈帳）

四郎兵衛と子吉太夫との間の世代交替は、四郎兵衛が単身で諸鹿山に入った時である。先掲(1)の忠右衛門がその子九郎右衛門に世代を渡すとき、やはり単身で移動しているの、木地師仲間にこうした慣習があったのかもしれない。氏子駈帳における四郎兵衛の初出が、元禄七年であるので、その世代は三六年となる。そして彼が諸鹿山に入った時は、既に六十才近い年令であったと思われる。隠居して息子の世話とならず、仲間づれで隣国に移住したことに、何かしら老木地師の意地を感じる。（表3に22四郎兵衛の名がみえる）子吉太夫は享保五年からその世代が始まるが、氷ノ山に移って以後の様子は一切不明である。あるいは因幡国側のどこかの山でその一生を終えたのかもしれない。

(4) 徳兵衛一家

延享一年（一七四四） 徳兵衛一家、新屋山に住む。家族数不明。（氏子駈帳）

寛延二年（一七四九） えび原に住む。家族数不明。（氏子駈帳）

明和一年（一七六四） 横谷に住む。家族五人。（君ヶ畑氏子駈帳）

明和七年（一七七〇）

徳兵衛娘没す。清屋妙心信女（龍泉寺過去帳）

明和八年（一七七二）

徳兵衛娘没す。林岳智山信女（龍泉寺過去帳）

安永六年（一七七七）

徳兵衛妻没す。孤岸妙舟信女（龍泉寺過去帳）

安永九年（一七八〇）

徳兵衛一家、秋岡山に住む。家族五人。その中に同居人長左衛門の名がみえる。（氏子駈帳）

天明二年（一七八二）

徳兵衛子没す。雲山宗秋禪定門（龍泉寺過去帳）

天明八年（一七八八）

徳兵衛没す。大観元庭信士（龍泉寺過去帳）

徳兵衛一家が明和一年、横谷に居たころは家族五人（夫婦・息子一人・娘二人）であったが、娘、妻を次々に失い、安永九年、秋岡山に住んでいるころは親子二人きりになっていた。氏子駈帳にみえる家族五人の中には同居人長左衛門の家族三人を加えていたのである。そのたった一人の後継ぎ息子が、天明の飢饉で亡くなったので、彼の晩年は哀れなものであったと思われる。そしてそれから六年後、彼もまた一生を終えてしまう。氏子駈帳初出の延享一年が二十代であったとすれば、彼も七十近い老人であったであろう。

(5) 助右衛門一家

正徳三年（一七一三）

助右衛門妻没す。妙意信女（龍泉寺過去帳）

享保二十年（一七三五）

助右衛門一家、新屋山に住む。家族五人。その中に子吉右衛門の名がみえる。（氏子駈帳）

元文二年（一七三七）

助右衛門の二度目の妻没す。妙髓禪定尼（龍泉寺過去帳）

元文五年（一七四〇）

助右衛門一家、横谷に住む。家族七人。（氏子駈帳）

延享一年（一七四四）

助右衛門一家、新屋山に住む。家族七人。（氏子駈帳）

寛延二年（一七四九）

助右衛門一家、えび原に住む。家族数不明。（氏子駈帳）

寛延四年（一七五二） 助右衛門一家、新屋山に住む。家族六人（氏子駈帳）

宝暦六年（一七五六） 助右衛門没す。了親信士（龍泉寺過去帳）

二度結婚し、しかもその妻に先立たれ、よく五人の子を育て、六二、六三才で一生を終えた助右衛門の姿であるが、新屋山を中心に何度か回帰を繰返している。息子に吉右衛門がいたが、その消息は一切わからない。氏子駈帳の因幡美作・播磨の項を調べても、同時代に吉右衛門の名が出てこない。従って助右衛門一代と考えざるを得ない。

註

- (1) 正保四年より明治六年に至る期間。
- (2) ミネルヴァ書房刊、杉本寿『木地師支配制度の研究』所載の蛭谷筒井公文所側の氏子駈帳原簿と、民俗文化研究会刊、橋本鉄男『木地屋の移住史―第一冊、君ヶ畑氏子狩帳―』の二種を併用した。
- (3) 明治六年、富田礼彦著、『斐太後風土記』（昭和五年、芦田伊人編、大日本地志大系収録、昭和四十三年雄山閣複製版）
- (4) 矢野佐著『原色樹木検索図鑑』、昭和三十九年、北隆館刊行。（図5・6はこの書から引用した）
- (5) 萩原直正『因伯の木地屋』（山陰文化選書1）七頁。
- (6) 小林喜明『智頭町の木地屋』（智頭町誌編さん委員会編）、一三三頁。
- (7) 杉本 寿『木地師支配制度の研究』、三五一頁。
- (8) 橋本鉄男『木地屋の移住史』一六～一七頁。
- (9) 杉本 寿、前掲書、三三〇頁、三七二頁、三七四頁。
- (10) 同書三二〇頁、三三一頁。
- (11) 渡辺久雄「但馬の木地師分布」（兵庫県の歴史、一〇号）八～九頁。
- (12) この二つの方向については大阪市立大学文学部地理学教室の平野昌繁助教授より示唆を得た。ここに感謝の意を表する。
- (13) 近江国小椋庄（現在、滋賀県神崎郡永源寺町に属する）に在る蛭谷の筒井八幡宮、君ヶ畑の大皇大明神を指す。
- (14) 蛭谷側の巡国年次は正保四年（一六四七）・明暦二年（一六五七）・寛文五年（一六六五）・寛文十年（一六七〇）・延宝七年

(一六七九)・貞享四年(一六八七)・元禄七年(一六九四)・宝永四年(一七〇七)・享保五年(一七二〇)・享保十二年(一六二七)・享保廿年(一七三五)・元文五年(一七四〇)・延享元年(一七四四)・寛延二年(一七四九)・寛延四年(一七五二)・宝曆八年(一七四八)・安永三年(一七四四)・安永九年(一七八〇)・寛政九年(一七九七)・寛政十一年(一七九九)・享和二年(一八〇二)・文政十三年(一八三〇)、以下不備。君ヶ畑側については中国山地木地師の記録が乏しく、元禄七年(一六九四)・明和元年(一七六四)・明和二年(一七六五)・明治五年(一八七二)に止った。

Summary

Some Life-histories of “Kijishi”

Hisao Watanabe

Many Kijishi lived in the Chugoku mountains from the 17th to the 19th century. They are known as wandering workmen, similar to the gypsies in Europe. The livelihood of the Kijishi was based on the manufacture of wooden tablewares, spoon, cup and trays from beech or horsechestnut. To be near materials for their work, they would erect their sheds on mountainsides, usually at about 600 meters height, and live there with their families.

After living in one place for about 10—20 years, they would exhaust the local supply of raw materials, and the group of 3 to 5 families would move on, seeking new sources of wood. While a few might return to a former residence after 30—40 years absence, many never came back to an old site.

This paper is a study of the life histories of some families of Kijishi from Mikatacho in Hyogo Prefecture, focalized to distribution and movement.